

人生往来手形（58・8・20）

松尾 心空（昭24文甲）

御紹介を受けました松尾でございます。

私の寺は西国の第二十九番の札所となっております。巡礼という思想は洋の東西を問わず、時の古今を問わず一般に広く流布している所でありまして、エルサレムへの巡礼とかメツカの巡礼とか御存知の通りであります。

人生苦悩のない者はありません。さて苦悩に耐える我々の姿勢というものを考えてみますと、頭を抱えてじつとうずくまっているのも一つの姿でありますし、今一つ考えられます事は、あてどもなくさまよい歩き続けるといった姿も考えられる訳です。歩くという生理的な働きが人間の苦悩を和らげるといった心理的影響を及ぼすという事があるのではなからうかと思えます。巡礼という思想はそういう事に基づいて起こってきたのではなからうかと私は憶測をしています。

ある人は、宗教を、拜む宗教と坐る宗教と歩く宗教との三つに分けておりますけれど、巡礼は

じんせいおうらいてがた
人生往來手形

栗山氏名
尾寺

右の者、あの世より縁あって、此の世に人として生を受けました者故所詮は此の世の間借り人であります。
美味とほめ、人と氣ます、事があつても我が身の至らぬせいと思ひなし、愚痴なく怒らず、食らず、程よく、此の世に眠るゝして元あの世に帰る者故精々親切大事に願ひます。

昭和 年 月 日

西国第三十九番青葉山松尾



歩く宗教に該当いたします。ところで西国三十三ヶ所巡礼と申しますのは、観音様は三十三に姿を変えて人をお救いになるという事が經典に説かれていますので、それに因んで三十三の観音様をおまつりしている寺を選んで、これを巡礼する様になつたというのが事の起りであろうと考えられます。

随分色んなケースを経て今日の姿になつたのですが、ほぼ八百五十年程前に今日の体裁が整つた様に察せられる訳です。全行程は約九百キロメートル余りありまして、当初は百二十日かかつてこれを巡礼したという記録が残っています。今日ですと乗用車で六日で巡る事と出来る行程でございます。札所と申しますのは、昔は自分の名前を書いた木札をお寺に打ちつけて巡りましたのでこれを札所といったのです。今日も那智さんを打つて

きた。紀三井寺を打ってきたという言葉が残っており、その事に基づいている訳であります。長い歴史があるものですから色々な話が残りました。どうもその昔、人間が悪い事をして地獄に行くのが多いので極楽行きも作りたいというのが閻魔さんのお考えだったと言うのです。どういう人に極楽へ行つて貰おうかとなったそうですが、参っていないのに参つたと嘘をつくのがございましたので、お参りした際に写経をしたお経を納める、これが本来の納経でありまして、これに対して受領書であります所の御朱印を貰ってくる様にといいしきたりが生まれた訳です。三高の方はあまりいらっしやいませんで御用がないのかしれませんが、御宝印を集めた納経帳をもち、死出の旅路に笈摺といひます経帷子を羽織りまして、閻魔さんの前でかくかくしかじかと言へば「それじゃ、極楽の方へ」という寸法になっていひます。「明日ありと思ふ心のあだ桜」でありますから、早く用意しておかれた方がいいのじやないかと思ひます。とても三十三ヶ所も忙しいと思われまはす方は大分遠うございひますが、せめて舞鶴は西国二十九番の松尾寺だけでもお参りして頂きますと多少の申し開きが立つのではないかと存じます。因みに判子代は二百円でございひますので、これも御案内を申し上げておきます。

巡礼の思想をターナという人類学者はコミュニタスの思想に基づくといひていひます。コミュニテイといひるのは共同社会といひことでありますけれど、ラテン語のコミュニタスといひのはもつと原始的な共同社会といひ風に定義づけていひる訳です。言うまでもなく、旅に出ます時は死出の

旅路の装束でありまして白い着物を羽織り、白い手甲、脚絆をつけます。ここでは身分の上下もありませんし、貧富といった様なことも一切なくなっています。行く先々の遍路宿ではお互いに物を分ち合い、旅先では各家が宿を供する事によって御利益を得るといふ様な有り様をコミニタスと定義づけているのであります。

さて、旅に出る動機というのは、人皆苦悩なき者はないのですから、その苦悩を観音信仰によって和らげるという事が最も大きな眼目であるといわなければなりません。大体参りにこられる人々の動機を分類しますと、亡き人の菩提を弔うということが第一に考えられます。亡き人の菩提を弔うと申しましても、世に最も悲痛なものは我が子に先立たれた親の悲しみでありまして、おそらくこれに勝る悲しみはないのじやないかと思ひます。私の寺は雪深い所でございます、年々五尺の雪はざらでありますけれども、その大雪の最中、先年和歌山から若い夫婦が参つてまいました。女の子の戒名を差し出して、供養をしてくれというのです。最近五つになったばかりの女の子を交通事故で亡くしたというのです。幼い子の魂を慰めたい一心で雪もものかわか巡礼してまいります若い夫婦の後姿は見るも哀れでございました。

子に先立たれた悲しみが最たるものといたしますと、それに次ぐ悲しみはやはり夫婦の別れではないかと思ひます。夫婦の別れと申しましても哺乳動物は、全て女性の方が丈夫に出来ております。まして長持ちいたします。御多分にもれず、人間も女性の方が丈夫で長持ちする様になっていま

す。人間、三分の一血が出ると死ぬと申しますけれども、半分出ても死なないのがある、と見ると女性だそうであります。先年、京都の医師会で講演を頼まれた時に、私の前にお話をなさったのは府立医大の血液の先生でございました。私はコレステロールと言うのは悪いのばかりだと思っていましたら、必要なコレステロールもあるのだという事を、その時初めて知ったのであります。HDLというコレステロールは必要なコレステロールで、LDLというコレステロールは悪玉だという事です。因みに善玉のコレステロールは、本来女性の体に男性よりも多く与えられているという事も聞きました、ここにも女性が丈夫であるという証拠があるのではなからうかと思いました。又、七十歳過ぎましたから妻に先立たれた夫は三年以内に七割は亡くなるという統計が出ています。けれど女性の方は夫の生死にかかわらず生き続けるそうでございます、これから見ても女性の方が丈夫であるという事が分かります。これは種族保存の自然の知恵であるといわなければなりません。同時に、より年上の男性が、より年下の女性を娶って結婚するというのは、その妻によって夫が死に水をとつてもらう確率を、より高とした生活の知恵であるといわなければならぬと思います。この逆をみると気の毒でありまして、私の寺に来てそうした境遇の方が、色々お話をなさいます時の様子を見てみますと、本当に気の毒な感じがいいたします。したがいました私も、一日でも早く家内より先に行かんらんとかねてより決意を固めています。が、どうか三高の皆様も奥様より一日でも早くお亡くなりになります様に御努力の程をお願い申

上げたいと思います。

巡礼の動機の第二はやはり心願成就の道行きです。池田元首相は、大蔵省に勤めまして宇都宮税務署長の頃であります。数万人に一人という奇病にとりつかれました。医者にかかっても治らない。薬をつけてもよくならない。人に勧められまして八十八ヶ所遍路の旅に出たのであります。さてその旅に出ようにも、足が崩れていて下駄すら履く事が出来ないの、やむなく足の裏に板をくりつけて、その板を引摺り引摺り遍路の道行きを終えたそうでございますが、不思議にもこの病が治りました。五年間休んだ大蔵省に復帰を許され、後台閣に登り印綬を帯びるにいたったというのは有名な話であります。いかに人間の精神が肉体に対して神秘的働きを及ぼし得るものであるかという事を、証している話ではなからうかと思えます。

今日は更にレジャーとか観光とかいう要素も増えてまいっております。

ともあれ亡き人の霊を慰める旅であり、かつ心願成就の道行きであり、そして又自然の風物を愛でるといった様な事が巡礼の動機であります。さて、その旅に出ます時に、昔必ず手に携えなければならぬものがありました。これを遍路手形、あるいは往来手形と名付けたのであります。自分の属しています菩提寺に参りまして身分証明書を書いてもらう。関所を巡ります時に、それを提示して歩くというのが慣わしでありました。したがって、日本最初の英和辞典（諳厄利亜語林大成、文化十一年（一八一四年）刊）を調べた所によりますと、パスポートという英語を

今日のように旅券とは訳さないで「往来てがた」、但し、てがたは手形ではなくて、文章の文、「往來文」と書いて「往来てがた」と訳しています。当時の時代背景から申しまして、これは当然の翻訳であったといわなければならぬと思います。

さて、今日は、国内の旅行に関する限り、この種パスポートを必要とせぬことは御承知の通りであります。考えてみますと私達の人生そのものが旅であり、人生そのものが巡礼であり、遍路です。ついでながら、遍路という言葉は四国の八十八ヶ所に使う事になっていまして、昔は遍路の「へん」は辺鄙の辺と書きまして、辺鄙な所の巡礼の道であったから辺路と名付けた訳でありますけれど、今はその言葉が転化しまして、遍く路と書いて遍路と読む様が変わっています。

以上申しましたように、人生そのものが巡礼であり、遍路であるならば、人生巡礼の心のパスポートというものもあっていいだろうと思ひまして、十一年ぐらい前に次の様な文章を書きました。

「右の者あの世より縁あって、この世に人として生を受けました者故、つまりはこの世の間借り人であります。されば、三度の食物にも文句を言わずおいしいと褒め、人と気まずい事があつても我が身の至らぬせいと思ひなし、愚痴なく、瞋らず、食らず、程よくこの世に暇乞いをして、元のあの世に帰る者故、せいぜい親切大事に願ひます。」

という文章でございます。文章を逐次読みながらお話をさせて載せたいと思ひます。

右の者とはみなさん方ご当人です。人はあの世から縁あつてこの世に生れる。その、あの世とやらへ我々は間もなくもう一遍帰らなければなりません。けれども、この「あの世」は、今一つはつきりといたしません。見方を変えていふならば、この世の方が夢であつて、あの世の方が確かな認識があるという様な形になっているのかもしれない。けれどもその時に考えられます認識というのは、少なくとも、今我々がここで感じている様なものでないであらう事は確かであります。まことに空空漠漠としている、それがあの世であります。

ただ、大変な年月を経て今日に至つたという事だけは間違いない。すなわち地球上に人類が生まれてから二百万年という。更に生命の源を辿つてアムールまで行きますと三十五億年という年月を経ている。その間、生命の糸というものが切れる事なく、絶える事なく、我々の五体によつてこの世に生を受けました、と説明出来るものは何人なんびともありません。思議すべからざる因縁でありますから、これを不可思議な因縁と申しております。縁あつてとは、この謂いであるといわなければなりません。説明のしようがないから、反面どの様ないい方も出来るということにもなります。最近は、非行少年の問題が世間を賑わしていますけれども、こういう子供達の親への言い草が「頼みもせんに産んだ」とか、「勝手に産んだ」とか言つております。どんな言い方も出来るからこうした賢さかしらな言い方が出来る訳です。ある人の説ですが「勝手に産んだ」といつ

たら、「勝手に産めるぐらいなら、お前みたいな馬鹿を産むか」と答えればいいんだそうです。こういう問答が起こりますのも、思議するべからざる因縁であるが故であるといわなければなりません。

たまたま非行の問題に触れましたので、最近色々な場でお聞きし、かつ見た事を総合いたしました。このことについては育児に一つ大きな問題があるのじやなかうかと、私は考えております。日本猿の生態の実験をTVで見ましたけれども、母猿は産んだ子猿を一年間は抱き続けるといのが彼らの習性であります。実験上、実に残酷な事でありますけれども、その子猿を強制的に引き離して他の檻に入れます。一定期間たつてその子猿を親猿の元に戻しても、母猿は、既に母性本能を喪失して、子猿を抱こうとしません。さて、問題はその子猿でありますけれども、これが、たまたま雌でありまして成長して妊娠する。そして、その産褥の場に臨んで、ということが起こったか。猿は、本来自らの胎盤を食べるといふ本能を持っているようですが、聞けばこれは胎児によって失なわれたエネルギーを補う蛋白源としての栄養があり、かつ又その中のホルモンで母乳の出を非常に促すものが入っているといった具合に、自然のからくりはうまく出来ているそうです。ですが、抱かれずして成長した子猿は、自ら自身が母となって産褥に臨んでその胎盤を食べるといふ事もしない。又子猿を抱こうともしない。三日後には、その子猿を死にいたらしめています。

彼らの成長の段階をみますと、密着と躰と自立という三つのプロセスを経過して行くそうですが、第一の階段を踏みはずした猿は、遂に第二、第三の過程に進む事が出来なかつたのであります。

省みてこれ人間に対して考えて見ました時に、胎児というのは母体の中では、物を見る必要がありませんから、この世に生まれた時に視覚の発達が非常に遅れている事は御承知の通りであります。しかし、母乳を含んだ時に、母親との眼の焦点だけは合う様に出来ているそうです。又一方、耳の方はお腹の中で振動しますので、三半器官は比較的発達してこの世に生れます。したがって泣いている赤ちゃんに、お母さんの心音をカセットに入れたものを聞かせてやりますと、静かに泣きやんで眠りにつくという事です。元来この世に生を受けて、第一に聞くのが母の心音でありますから、これは当然の事であるといわなければなりません。そういうことをふまえて、世の母親となる人、母親となった人に、私が最初に赤ちゃんを抱く時に、どちらの手で抱くかという事を尋ねましたところ、異口同音に左手で抱くという答が戻ってきました。すなわち、左手で抱いて耳を心臓に最も近づけて乳房を含ませ、唯一焦点の合う所の目を見合わせながら、母子の感情は深まって行くという構造になっているというのでございます。

よく仏像で首をひねった思惟像といわれる姿がありますけれど、これも母が赤子に乳を含ました時の首をかしげた姿になぞらえているのだという説もあります。いずれにいたしましてもこれ

は人間の「密着」の段階でなくてはなりません。さて、この話をつい先日助産婦さんの集りで話しましたところ、そこで、明治乳業の方から心音と血流音と一緒にした音が、ぬいぐるみの中から聞こえるおもちゃが出来ているという事を聞きました。

ところで戦後の育児を考えてみますと、例の抱き癖をつけるなということがあります。母乳よりも人工乳の方が、より栄養のバラエティに富んでいるという説もあつた様に聞きます。甚だしきは、パンを食べると頭がよくなって、米の飯を食べると頭が悪くなる、という陳腐な育児論が一般に多く流布したと思います。抱く時はしっかり抱く、という事が今日忘れられているのではなからうかと思えます。ところが、今日赤ちゃんを負んぶしているのをみますと、背中に背板の様なものをつけて、赤ん坊を自分の方に向けしないで、グルリと反対の方向に向けて結びつけていたり、ベビーカーなどというものでひっぱり回したりしているのが、今日の姿ではなからうかと思えます。まず最初に、必要な密着がなかったために、躰の段階で甘えが残り、自立の段階において躰がなされておらず、かつ又甘えが残っている様なのが今日の有り様ではなからうか。そういう躰寄せで子供達は自分の道に迷う、そうしたプラスチックが、非行といった事実にならせてはいはしないだろうか、とこれは、私の一つの憶測であります。

さて、この世に縁あって人として生れました。生れながらにして人間である我々は、人間である事にさして異を感じておりませんけれども、考えてみますとまことに不思議な事であります。

自動車に轆かれて道端に血をはいっている猫をみる、腸を出している犬をみます時に、人間は丁重に葬られて行くけれども、はたして犬猫の行先と人間の行先にどれだけの違いがあるのだろうか。ふと疑問にとりつかれる事がございます。輪廻転生という考え方の出てくる所以であります。ともあれ今生において、我々は得難き生を受けたのであります。すなわち無辺際ともいうべき過去から、まことに不可思議な御縁によって人としての生を今日受けているという、この事実であります。しかし、今日という日は二度と再び訪れる事はございませんし、只今という現在の瞬間は次の瞬間に於て必ず過去でございます。そして、否が応でも将来待つておりますものは死であり、これを免れる者はございません。そうすると、人全てこの世の間借人といわねばなりません。五軒借家があるからといって、この世の大家であるはずがございませんし、十軒借家があるといつてもこの世の家主であるはずはない訳です。

されば「三度の食物にも文句を言わずおいしいと褒め」、居候は三杯目はそつと出し、でめつたな事で他の家について、うまい、まずい、甘い、辛いと苦情をいう者はおりません。

先年私はインドへ旅をいたしてまいりました。十七人の坊さんと一緒に行きましたが、その日常生活は、昭和五十二年当時で平均の日当が百五十円でした。誠に惨めなもので食料事情は、日本の敗戦直後以下といつても過言ではないと思われました。行く先々には裸足の子供が待ちかまえている。金をくれ、食物をくれとせがみます。弁当の食べ残しを差し出してやると、取り合い

をするというのが子供達の現状です。また、カルカッタの大都會で見ましたのは、十六歳ぐらいの両足首を切断した少年が、裸のまま、短ズボン一つで、街路をころげ回って食べ物求め、金をせがんでおりました。私が直接目にする事はなかったのですが、路上でお産をしている婦人の姿も見た、という事も聞きました。こうした姿を見るにつけ、今日福祉を標榜いたします日本の大都會の目抜きの大通りで、此の種両足首を切断した少年が、物乞いして街路をころげ回っている姿を許しておくかどうかを考えてみました時に、本当に日本は結構な国だと思わざるを得なかったのです。

そして羽田へ帰りました時、私の目につきましたのは、大きな垂れ幕でした。それには、春闘値上げ、一万三千円と書かれていたのです。昨夜飛び立った国は百五十円の日当の国、今、降り立つ国は一万三千円の値上を要求する国です。彼我の差は誠に大きい事を痛感いたしました。顧みて今日の日本の経済の繁栄というものが、数百年にわたる儒教教育による節儉、努力の美德に基づくものであるとはいえ、より多く日本をめぐる国際情勢が、我が国にとって極めて幸運に展開した、という事実を見逃す事は出来ませんし、かつは又資源のない日本の国だという事を考えました時に、我々は、もっと日本の国を大切にすると心に於て、欠くる所なきやという事を痛切に反省させられたものでございます。食べ物一つにしても、今日は、少し贅沢に流れすぎておりはしないだろうかと思えます。したがって、出来れば、月に一度ぐらいは、敢えて粗末

な食事に甘んずる、敢えて乏しきに耐えるといった日を、積極的に作る生活のサイクルもあつてもいいのじやなからうかと思ひます。また、どんなにえらそうなことを云つたとて、停電しないと電気の有難さが分らない。水道の蛇口を捻つて、水が出なくなつてはじめて水一滴の尊さが分るといふのが我々の感性であります。所詮、白い紙の下に白い紙を敷いたとて、上の白い紙の輪郭を我々は知るすべはありません。白い紙の下には、黒い紙を敷いてこそ、はじめて上の白い紙の輪郭が分る訳でありますから、飽食の時代にも、あえて乏しき日、貧しき日を設定することによつて今日与えられている豊かさに対する認識と感謝の芽生えが生れるのであります。だから貧しき日、乏しき日を作る生活の知恵があつてもいいのじやなからうかと思ひるのであります。

『人と氣まずい事があつても、我が身の至らぬせいと思ひなし』、どうしても、人間にはエゴがございますから、自我中心で物事を考えようといたします。我というものを容易に取り去る事が出来ません。舞鶴の海上自衛隊に、二十何年も前から話に招かれています。昔、若い隊員から、どうして上官に敬礼しなくてはいけないのだと、質問を受けたことがございます。民主主義の時代ではないのか、人間はみな平等じやないのか、位が一つ上だとか、星が一つ多いからといって、どうして、先んじて礼を尽す必要があるのだと、こういうような質問でありました。理詰めの説明は、すこぶる困難に思われましたので、一つの比喩で説明を試みました。どこの家庭にもある梯子を例にもち出しまして、使わなない時は梯子は横にねかせているので、梯子の横木というのは、

同間隔で同じ高さになっている。平等の姿をしている。しかし、使う時は立てなければならぬ。梯子の横木は、上下の秩序があつて、はじめて梯子の用をなす。旧封建主義道徳は、すべて悪かつたとは言わなければならない。梯子を立てる事はかりを主張して、休める事を知らなかつた。また、今日は、休める事ばかりをいつて、立てる事を知らないならば、これ又一方的である。梯子を使う時は立て、用を終えたら休めるごとく、我々人間社会の組織も、始業の時間が来たら、梯子の立っている姿であり、終業の時間が来たら、暖簾に首をつつ込んで一杯やろうと、梯子の横に寝た姿に戻る。これが真の民主主義ではないだろうか。したがつて、人間は平等であるけれども、梯子の立てた姿に於て、上司に対して礼を尽すという約束事があつて、はじめてその組織は機能する事が出来る。これは、梯子を立てて、その用をなすのとまったく同じ事情にある。

しかし、握飯を固からず軟らかからず握るのにも八年の歳月を要するといふがごとく、自ら民主主義の精神を会得するためには、八年はおろか、更に長年月の心掛を要するであらうことをまたぬところである。とまあ、こういう様な説明を試みたのであります。とかく今日の民主主義はエゴが先行するものですから、義務よりは権利を、規律よりは自由を、あるいは秩序よりは平等をと、こうした一方的な事に墮しがちのきらいがあるのではななかりかと思われるのでございます。いわば、大きな心、エゴなき心というものはなかなか言ふべくして得難いと言わなければなりません。

『愚痴なく、瞋らず、貪らず』、逆にいたしますと、これは貪、瞋、痴で、仏教ではこれを三毒と名付けていますが、これを愚痴なく、瞋らず、貪らずといたしました。

人間は食欲の存在であります。先程の例でいいますと、我々日本はインドの人の四十倍、五十倍の生活をしているといっても決して過言ではないだろうと思います。じゃ、日本人は四十倍満足した顔をしているか、五十倍豊かな顔になっているか、と言うと決してそうではございません。なぜなら、欲は果てしないものであるからです。一人の人間の欲を十全に満たそうとすると、雲をつくヒマラヤの山を金にかえて三つ重ねてもまだたらないと、嘆かれたのは他ならぬお釈迦様でございます。

そうすると、やはり物の冥加を感じ、分に安んじ、足るを知り、感謝の心を忘れてはならないと思うのであります。コップ半杯の水がありましても、コップ半杯の水しか飲めないという気持しか持てない人と、コップ半杯の水でも飲めるんだと考える事の出来る人とは、この短い人生に於てどちらがより幸せかいうまでもありません。また腎臓を悪くして人工透析をしている人は、一日に飲む事の許される水の量は牛乳瓶に一杯だけだと申します。そしてこういう人達の願いはただ一つ、尾籠な話ながら、あわの立つ様なオシッコをしたいと、願っていると聞きました。考えてみますと、水一杯飲むにも、小用を足すにも感謝の心があつてしかるべきでありましょう。しかし、この心がなかなか持てないのです。我が手の平の上の幸せを握る事を忘れてはならんと

申しますが、やはり与えられている事の有難さを忘れてはならないと私は思います。貪る心が少なくなれば、瞋る事、愚痴る事が少なくなるはずであります。

そして、「程よくこの世に暇乞いして」、これはなかなか難しい事柄でありまして、皆様もそれぞれ程よくお考え下さい。

そして「元のあの世に帰る者故」、所詮は旅の仮寝の草枕でございます。この短い人生をより豊かに如何に生きるか、如何に生き甲斐を感じるかという事が問題であろうと思われます。つきましては、こうした心掛を持って暮している者であるから、世の人よ、我がはらからよ、我が同僚よ、せいぜいこの私を親切大事におとり扱いの程よろしくお願い申し上げますという次第です。以上、人生巡礼の、人生の旅の心のパスポートという意味の人生往来手形でございます。時間がまいりましたので御無礼をささせて頂きます。どうもありがとうございました。

(西国二十九番松尾寺住職)